

## メルロー・ポンティの〈言語表現と解釈〉論

### La Théorie sur l'expression verbale et l'interprétation selon Merleau-Ponty

浦 沢 和 子

われわれ人間は、魚が水をその固有の環境としているように、言語を固有の環境としてその中で棲息し、言語で思惟し、心要があれば己が思惟の内容を言語によって表現し、かつまた言語<sup>(1)</sup>でもって表現となった他者の思想を解釈し受容していく。われわれの生をそしてわれわれの他者との交流を言語という象面から観るならば、それは、言語による思惟・表現・解釈という言語活動の不断の行使であり反復である。かかる言語活動は、馴れ親しんだ日常生活の地平においては極めて自明の現象と見做され、それは特別に問や反省の対象と目されることもないまま黙視される傾向がある。

しかし、われわれに余りに身近なそれ故自覚的に行使されることの困難なこの言語活動という事柄からわれわれがひとたび身を退き距離をとって眺め、われわれ人間にとって言語とは何か、われわれは何故表現するのか、われわれは表現したいと欲するものを剩すところなく言語表現へともたらしうるのか、そしてともたらしえないとしたらそれは何故か、またひとたび言語表現へと定着されたものをわれわれは透明で十全な理解へと到達させうるのか、また到達させえないとしたらそれは何故か、等々といった問を発しはじめると、われわれは、言語活動についてのわれわれの差当りの手持の了解を総動員してもこれらの問に対して明快な解答を速やかに与えられえず困惑するという事態に陥るのが通例である。つまり、われわれにとってそれまで自明であった言語活動という事柄が、その自明性を失い謎めいた様相を帯びてき始め、われわれは不断に言語活動を行ないながらそれについて実のところ不透明で曖昧な暗い了解しか持たせていないことに気づき愕然とするのである。それは、あたかもソクラテスが善美を問いつづけるやそれについて明確なことを何も知っていないことを見出したときの驚きに似ている。

この驚きは、われわれをして、言語活動についてのわれわれ自身の暗い了解に照明を当て明るい了解にまでもたらしたいという欲求を抱かしめる。そのとき、われわれは、言語活動について深い思索を凝らしたメルロー・ポンティの言語論に遭遇するのである。われわれは、彼の言語論を通して、言語による思惟・表現・解釈という言語活動のもつ深い隠れた意味をある程度露わならしめることができるであろう。

ところで、われわれは今まで、言語による思惟と言語表現とを区別する常識的理解に一応従って、言語活動とは言語による思惟・表現・解釈の三つを指すと見做してきたが、メルロー・ポンティは言語による思惟それ自体が言語表現であると考え。思惟と言語表現との同一視というこのメルロー・ポンティの観方についての詳細は後に改めて取上げるが、かかるメルロー

・ポンティの観方に従えば、言語活動は言語表現と解釈の二つにまとめられる。

そこで、われわれは以下、発酵状態にある思想が全てそうであるように示唆と含蓄に富むが一義的な明確さをやや欠いている憾のあるメルロー・ポンティの論述を再構成していくという形をとりながら、彼の言語表現と解釈という事柄へのアプローチを追思し、われわれ言語活動主体と言語活動との即自的な関連性を対自化させていくことにする。

### (1) 身体表現と言語表現

メルロー・ポンティの言語論は彼の身体論と密接な関連性を有しており、むしろ身体論としての言語論ともいうべきものが展開されているので、両者を切り離して論じるわけにはいかない。そこで先ず彼の身体論を押えておく必要がある。

精神と身体を完全に分離し前者を世界への自己超越的にして自己明証的な純粹意識後者を内面なき自己充足的物体と定義し、前者を主観後者をその主観の対象となる客観と捉え、後者の確実性の根拠を前者に求め前者によって後者を基礎づけてゆくデカルト的観方からすれば、心身合一であるはずの人間存在も、無身体的な純粹主観となって自己ならざる世界へと一挙に超出し世界と自己について明証的に認識する〈思惟する主体〉であるということになる。心身分離に立脚し人間存在を思惟主体として捉えるかかるデカルト的人間把握に対して、それは人間の身体的存在者としての側面を不当に無視する一面的抽象的人間把握であり人間存在をその全的具体性において捉え損うものであると批判するメルロー・ポンティは、人間を心身の不可分離の統合体としてその全体性において捉えようと企て、デカルト的身体観に対する修正変更を行なっていくのである。メルロー・ポンティによれば、人間の身体は、デカルトの主張するような思惟の容体と化しうる死せる物理的身体ではなく〈生ける身体〉<sup>(3)</sup>であり、この生ける身体は、それ自身自己充足的な在り方をせず「それが在るところにあらず、それが在るところのものではない」というような自己自身に充足せず常に自己以外のものを志向して自己の住まう場<sup>(4)</sup>でありながら自己を超えている世界へと自己を超出させてゆく自己超越的な在り方をするのであり、その自己超越を可能にしているのが身体の運動能力なのである。このように身体に脱自的構造を認めるメルロー・ポンティにあっては、人間存在は、もはや純粹意識の思惟能力によって世界へ超越する思惟主体ではなく、身体の運動能力によって世界へ超出していく〈動く主体〉であるということになる。

更に、メルロー・ポンティによれば、身体がその運動能力によって世界に住み込み世界へ超出していくとき身体と世界との接触が生じ、その接触によってはじめて意識というものが出現してくるのであるが、この意識はもはやデカルト的な世界と自己自身についての透明な把握をもつ純粹意識などではなく、身体によって受肉された世界と自己自身についての不透明半透明な曇った了解しかもたない意識、すなわち地の上の図という構造をもつことによって世界と自己についての意味を素描し原初的意味を分泌している知覚的意識<sup>(5)</sup>なのである。知覚がこのように意味を表わしているということは、身体の運動性に意味志向の力があるということであり、従って身体とは「他の一切の表出空間のうちの一表出空間であるにとどまらず」「他の一切の<sup>(6)</sup>

表出空間の根源であり、表出の運動そのものであり、それによってはじめて意味が場所を与えられて外部に投射され、意味がわれわれの手許に、われわれの眼下に、物のように存在しはじめる」のである。

(6)  
こうして、「人間が身体を使う行為は皆すでに本源的に表現である」とみるメルロー・ポンティ<sup>(7)</sup>にあっては、言語表現は当然身体表現に連関づけられてくる。従って、言語論を展開するにあたっては、＜思惟する主体＞よりは＜動く主体＞に近い＜語る主体＞からその考察が開始されてくる。メルロー・ポンティによれば、語るという行為は、咽喉の筋肉の収縮、舌と歯との間からのヒューという空気の放出というように発声器官というわれわれの身体の或る種の使い方であり、それが突然あるひとつの比喩的な意味を授与されてわれわれの外部に向かってそういう意味を指示するようになるわけであり、その意味では語る主体の語るという行為すなわち言語表現は身体の可動性に根ざした身体表現であるということのできるのである。

このように、メルロー・ポンティは言語表現と身体表現との間に深い類縁性を認めているのであるが、しかし彼は両者を単純素朴に類比させ言語表現を身体表現に還元・解消しているのだろうか。メルロー・ポンティ自身は、言語表現と身体表現の親近性について指摘することは多いが、両者の相違については明快な指摘を行っていない。だが、マディソンの指摘する処によれば、メルロー・ポンティにおける言語表現と身体表現との関係は、現象学でいう基礎づけの関係であるということになってくる。或るものが別のものを基礎づけておりその別のものが或るものに基礎づけられて現われてくるという基礎づけの関係において認められることは、＜基礎づけるもの＞として働く項は、＜基礎づけられるもの＞が＜基礎づけるもの＞の一規定乃至一顕在形態として現われるという意味では最初のものであり、このことが＜基礎づけられるもの＞による＜基礎づけるもの＞の吸収を不可能にしているのであるが、しかし＜基礎づけるもの＞は経験的な意味で最初のものだというわけではなく、＜基礎づけられるもの＞を通じてこそ＜基礎づけるもの＞が姿を現わすのであり、その限りにおいて＜基礎づけられるもの＞は＜基礎づけるもの＞の単なる派生物ではないということである。従って、言語表現と身体表現との関係をこの基礎づけの関係において見るならば、身体表現は言語表現を基礎づけ後者は前者に基礎づけられているということになり、言語表現は身体表現に由来しうるとしても身体表現は言語表現の原因とはならず、それ故言語表現は身体表現に還元されえず身体表現を超えているということになってくるのである。マディソンが指摘するように、言語表現が身体表現に基礎づけられそこから派生しながら身体表現を超えているとするならば、その超越を可能にするものは何であるのだろうか。メルロー・ポンティに従う限りでは、言語表現とは言語を媒体として介在させる身体表現であるということになるであろうが、このように言語表現を捉えるならば、言語表現が身体表現から超越する可能性の根拠をわれわれは言語に求めざるをえないであろう。

かくて、メルロー・ポンティにあっては言語表現と身体表現との相違を決定づけるものが言語であるとすれば、われわれはここでメルロー・ポンティの言語観について改めて問わなければならない。だが、彼は、言語それ自体を取上げて考察することはなくむしろそれを斥けるの

である。メルロー・ポンティによれば、言語学者たちが好んでやるように言語を表現という言語行使主体の主体的行為から切放して言語そのものを上空飛翔的に対象化して考察することは、既に出来上った言語の言語学的諸事実についての研究の域を出ないことであって、それは言語についての過去の論理を明らかにすることはできても、語る主体たちによって現在行使されそれによって新たな意味を再創造していくという言語についての現行の論理を捉え損うことになるのである。かくて、メルロー・ポンティは、言語を直接的に透明に把握しうるのは、ただ言語を行使することによってであり観察することによってではないとして、言語と表現とを飽くまでも結びつけて考察していく。従って、メルロー・ポンティの言語観は彼の言語表現論を通してはじめて明らかとなってくる底のものであるが、彼はその言語論なかんづくその言語表現論を展開していくうえでの導きの糸としてソシュールから二つの基本的な言語観を導入している。

そのひとつは、ソシュールの記号差異の原理である。この記号差異の原理とは、記号には意味を表現する機能としての〈意味するもの〉と表現された意味としての〈意味されるもの〉との二つの部分があり、〈意味するもの〉とはより詳しく言えば記号の形に相当する部分で具体的に言えば音声や文字の形などを言いそのあり方は自己表出的な合意性であるが、〈意味されるもの〉のあり方は対象指示的な明示性であって、記号においてはこの〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉とが一枚の紙のように不可分になっているのである。だが、言語記号は、煙が火の存在を告知するように、その特定の意味を明示性そのものにおいて指示するという指標的な在り方をするものではなく、言語記号においては、〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉との関係は、一対一対応的な有契的なものではなく恣意的無契的であって、それ自体としては曖昧な意味しかもっていない記号は、他の諸記号との間の差異や隔りによってはっきりした意味をもたせられるようになるのである。従って、言語記号においては、〈意味するもの〉が、その〈意味されるもの〉をある程度の明示性において指示することはあっても完全な明示性において指示するということはなく、記号の〈意味するもの〉はその〈意味されるもの〉を常に超過している、というものである。

言語記号それ自体はそれ固有の意味を内属させておらず、記号は他の諸記号との差異によって意味を獲得するというこうしたソシュールの指摘をそのまま踏襲したメルロー・ポンティ<sup>(9)</sup>は、「（言語）表現の根本的事実とは、諸記号には決して含まれていない意味へ向かって諸記号を超えてゆくことであり、或いは〈意味されるもの〉が〈意味するもの〉を超えてゆくことなのである」と言う。そして、「意味は、さまざまな語の交叉点に、いわばその中間にのみ現れる<sup>(10)</sup>」のであり、「記号のそれぞれは、別々に取上げれば曖昧で平凡なものであって、ただそれらを結び合わせることによってのみ意味が生ずる<sup>(11)</sup>」とされる。このように、メルロー・ポンティ<sup>(12)</sup>にあっては、言語表現とは、それ自身の純粋に明示的な意味を内在させている諸記号を組み合わせることではなく、〈意味するもの〉がその〈意味されるもの〉へとのりこえられてゆくことなのであるが、その際〈意味するもの〉は絶えずその〈意味されるもの〉を超過しているのであり、それ故言語表現は己れの明示的な意味を完全に隈なく与えることは決してできない

のである。その限りでは、いかなる言語表現も絶対的に透明な意味を獲得することはできないのであり、その意味においてあらゆる言語表現は、不透明で沈黙の部分を残した間接的表現であり不完全な表現なのである。こうして、メルロー・ポンティにおいては、決定的な表現・完全な表現という観念は無意味であるとして破産宣告され、完全な表現などというのは幻想であり神話でありカント的な意味での理念であるとされるのである。しかし、だからこそまた、「意味の発生は決して完成することはない」<sup>(13)</sup>のであり、意味の発生乃至出現としての表現も人間の歴史や文化において止むことがなく日々新たに更進され繰返されてゆくことになるのである。

ところで、以上でみたように、記号は記号以外の何かを指示する標識ではなく、記号と意味との間には無契的關係しかないのにもかかわらず、言語表現において記号は意味へとすなわち＜意味するもの＞は＜意味されるもの＞へとよりこえられるのではあるが、このよりこえを可能にするものは、メルロー・ポンティによれば、語る主体の語る言葉の意味志向の力である。この言葉の意味志向の能力は、既に指摘したことでもあるが、意味を出現させ分泌するあの動く主体の身体の運動性による意味志向の能力と似ておりむしろその一種であるともいえるが、言語的意味志向としての言語表現が非言語的意味志向としての身体表現を超えている所以を言語に求められるとしたら、それは言語の如何なる性格によるものとメルロー・ポンティは考えているのかというわれわれが既に先に問として提出しておいた点についての解答を、われわれはやはりこの記号における＜意味するもの＞と＜意味されるもの＞との無契性という処にみることができるであろう。＜意味されるもの＞に対する＜意味するもの＞の恣意性・無契性によって、言葉は言葉の外にある意味や概念を表現する外的指標ではなくなり、言葉はその意味との粘着性を断切り、事物や現実への密着や従属から解放され、間接性と自立性をもつようになり、言葉自身が意味を創り出してゆくのである。言葉がこのように「間接的かつ自立的」<sup>(14)</sup>であるからこそ、言葉表現は、「ここ」と「いま」の場所的時間的制約を蒙る身体<sup>(15)</sup>の運動性からくる身体表現の直接的現実依存を超えてゆくのである。言葉は、言葉自身の力によって＜現実のどんな花束にもないもの＞を出現させるのであり、「事物に対してわれわれの遠近法を課し、それらの中に一種の浮彫を作りあげる」<sup>(15)</sup>のであり、だからこそわれわれの言葉は嘘を非現実を虚構を紡ぎだしてゆくのである。そして、これは後述の解釈の問題とも関連してくるのであるが、われわれの語る言葉は、ひとたび生まれるとたちまちわれわれから離脱しわれわれ自身とは異なるそれら自身の生存と独自の生命をもつようになり、いわゆる作品の作者からの自立が始まるのである。かくて、言葉は、身体表現の場合と異なって、表現操作は無限に繰返されうるのであり、「絵画について画くことはできないのに、言葉については語りうるということもある」<sup>(16)</sup>という特権性をもつに至るのである。

だが、ここで、ひとつの問題が残されてくる。それは、身体表現が何故如向にして言語表現へと赴くのか、すなわち沈黙せる無数の知覚的意味の交錯している知覚的世界から名づけられ語られる言表の世界の地平が如向にして開示されてくるのか、更に言に換えるならば、人間は何ゆえに＜動く主体＞から＜語る主体＞へと転化変貌してゆくのかという身体表現から言語表

現への移行と言語表現の開始の根拠乃至所以という問題である。しかし、メルロー・ポンティは、この点については明快な論究を行なっておらず、ただ暗示的に「言葉とはわれわれの実存が自然的存在を超過しているその余剰部分であり、実存はそれ自身の非存在の経験的支えとして言葉を創造する」とか、<sup>(17)</sup>「あらゆる表現操作のうちひとり言葉だけが、沈黙作用をおこしてひとつの相互主観的な獲得物を構成することができる」とか、<sup>(18)</sup>沈黙せる知覚的意味は言葉化することによって「無時間的なものになる」と言っているだけである。<sup>(19)</sup>彼のこれらの言及から推すと、言語は、われわれの身体すなわち私と他者たちの身体が世界との接触によって知覚的世界という地平において作り出している無数の豊かな沈黙せる意味の織りなす交錯の中から、客観的概念的理念的意味を獲得するものである。<sup>(20)</sup>しかし、この理念的意味が、後述する如く、逆に、知覚的世界における生まの初発的意味を不透明にしその現実化の桎梏と化し知覚的世界の抑圧・虐待として機能することもあるのであるから、われわれは、身体表現から脱けて言語表現へと移行してゆくことの意味と無意味に直面するわけであり、この移行の問題・言語表現の開始の所以と根拠の問題を究明していくことは肝要であると思われるが、メルロー・ポンティの言語論には、この問題への自覚的な論及は未だなされないままに終わっているのであり、彼はそれをわれわれの課題として残しているのである。

## (2) 原初的表現と二次的表現

さて、メルロー・ポンティは、その言語論展開の為に、記号差異の原理の他にもうひとつ言語をラングとパロールの両側面から捉える言語観をソシュールから継承し、言語表現について更に深い考察を巡している。

ラングとは、言語の社会的な側面であり、同一の言語共同体に属する成員の間の相互理解のために人為的に制定された規則の総体を指し、具体的に言うならば、語彙や語の活用方式あるいは文法的規約などから成る出来上がった国語である。これに対して、パロールとは、言語の個人的な側面であり、個人の具体的な話す表現行為としての発話を言う。<sup>(21)</sup>

メルロー・ポンティによれば、語る主体は彼の属する言語共同体の共有財産であるラングを用いてパロールを行なうのであるが、ラングは語る主体が語るためにはそこから汲み出してこななければならないものであり、この公共の既成言語なくしては語る主体はいかなるパロールも行ないえないのである。しかし、語る主体が語るために依拠しなければならないこのラングも、もとはと言えば、語る主体たちが何千年にも亘って行なってきたさまざまな過去のパロールが集積し沈黙した結果ひとつの相互主観的な言語世界が確立し、その共通の言語世界の中で形成され制度化されたものなのである。語る主体は、彼の属するラング共同体の中で過去のパロールの寄託物であり沈黙物である公共化された既成の諸意味にとり囲まれており、それら既成の諸意味を己が手持の意味として自分自身の裡に取込み、それによって自分自身をつくりあげているのである。従って、語る主体が己が言語共同体内部でそれら既成の諸意味を表現する限りでは、何ら特別な努力を要することはなく、語る主体は、既成の意味のはめ込まれた語を己が手足のように自在に操って表現を行なうのである。

このように、語る主体としてのわれわれは、ラングの既成の意味体系に生まれながらにしてとり囲まれそれに依拠しながらはじめて言語表現をなしうるのであるが、もしわれわれが既成の意味しかもらえず従って過去のパロールを越ええないとしたら、われわれは既成言語の忠実な守護者になり終るしかないであろう。しかし、メルロー・ポンティにあっては、表現において重要なのは、「語られた事柄を再び組織し、これに新たな弯曲率を与え、意味のある種の起伏にそってこれを折り曲げること」つまり自由に使用しうる手持の諸意味を変形させ新たな意味を住まわせることなのであり、新たな意味を開拓し創造していくことなのである。<sup>(22)</sup>

ここに至って、メルロー・ポンティは、原初的表現あるいは創造的表現と二次的表現あるいは経験的表現とを区別してくるのである。二次的表現とは、われわれが日常一般に行なっているような、手持の諸意味を既得の財産でもあるかのように享受して既に語られ使いふるされたパロールを慣習的・惰性的に繰返し使用していくような表現であり、この表現においてみられるのは語られたパロールとしての二次的パロールである。これに対し、原初的表現とは、既得の諸意味がはめ込まれた語を用いて未だ語られざる新たな意味を誕生させる表現であり、この表現においてみられるのは、意図的意味が発生状態で見い出せる語るパロールとしての原初的パロールである。原初的な語るパロールは、ひとつひとつ取上げれば漠然とした陳腐な観念が対応しているにすぎない惰性的な諸記号すなわち語を創造的独創的に組合わせることによって、存在の充足の中に囚われていた沈黙せる意味を解放してゆくのである。

では、既成の諸意味の機械的反復的組合わせにすぎない二次的表現に飽き足らず、語る主体をして原初的表現へと駆立ててゆくものは何なのであるだろうか。メルロー・ポンティはそれを、真のコギトならざる沈黙のコギトに求めている。真のコギトとは思惟主体としてのデカルト的コギトを指しており、このコギトは世界と自己についての意味把握・意味定立を行なうべく積極的客観的な方向に働くのに対し、沈黙のコギトは身体的コギトであって、これは何らの積極的な意味定立も行なわずそれどころか逆に、既得の意味に絶えざる異議申し立てを行ない、自由が奴隷状態に対するように既成の意味の支配の重圧をはねのけていこうとする方向に働くのである。語る主体を支え包んでいるのはこの沈黙のコギトであって、このコギトに導かれて語る主体は、既意の意味づけの透明さによって逆に不透明にされ無言のままでしかわれわれ語る主体に現前していない沈黙の意味を言葉によって解放し獲得するよう促されるのである。

かくて、新たな意味の開拓者・解放者・渉猟者たらんと志し未だかつて名ざされたことのないものを言い表わしそれに名を与えるべく献身せんと企む才能ある作家は、既成の意味づけに充ち充ちたラングに恐らくは激しい異和感を抱くであろう。しかし彼はなおかつそのラングから出発しなければならないのである。そこで彼はそのラングを彼以前の何人も用いたことのないように使用するであろう。そしてそれは、彼の文体の練磨・創造にも対応していくであろう。だが、この作家の創造的表現が、ひとつの言語学的記号の形をとりそれに他の記号が反応できるようになるにつれて、表現は話される言葉と書かれる言葉の中にその社会的客観性を獲得するようになっていく。こうして原初的創造的表現としての語るパロールは言語集団のうちで次第に市民権を認められてゆき既成言語体系の中に沈黙して定着するようになっていくが、こうし

た言語学的変化がラングとして確立されていく過程そのものは、語る主体たちの反復的パロールの活動によってであるのだから、語られたパロールとしてのラングの客観性の下に活動する語るパロールというものが発見されるのであって、通常それは忘却され覆い隠されているのである。

さて、われわれは、(2)原初的表現と二次的表現 においては、言語の社会的側面と個別的側面との連関を明らかにするため、メルロー・ポンティの使用しているラングとパロールというフランス語をそのまま用いてきたが、(1)身体表現と言語表現 においては、パロールに言葉という訳語を当てておいた。そこで、論述の前後の混乱を避けるため、以下、ラングに国語、パロールに(1)身体表現と言語表現 におけると同様言葉という訳語を当てて使用していくことにする。<sup>(23)</sup>

### (3) 言語表現と思惟

われわれは今まで、メルロー・ポンティに従って、言語表現というものの内奥にたちいってわれわれ言語行使主体と言語との即自的連関を対自的に明らかにするべく努めてきた。だが、ここで、思惟というものが言語に附随する重要なテーマとして浮かびあがってくる。なぜなら、思惟というものを行なう際、われわれはそれを沈黙のうちにを行なうとしても、口に出されざる内言と化した言葉によって行なっているからである。では、言語表現と思惟とはどのような関係にあるのであろうか。

われわれは、通常一般に、思惟が言語表現以前にそれ自体で既に存在しており、言葉はこの言葉以前の思惟を定着するための手段であると思込みがちである。しかしこうした思込みは、メルロー・ポンティをして言わしむれば、思惟と言葉を別々なものとして固定的に捉えそれらの間に外面的な関係しか考えられないようにしていることによるのである。メルロー・ポンティによれば、思惟というものが言葉に先立ってありそれが言葉へと赴いてゆくというのではなく、それどころかむしろ「思惟と言葉は唯一にして同じ現実の二つの契機にほかならない」のであって「思惟というものと言葉というものがあるのではな<sup>(25)</sup>」のである。われわれ<sup>(24)</sup>が、自分の思想を自分に対してははっきりと口に出したり書いたりしないうちは、自分の思想に対して自分が一種の無知にとどまっているというもどかしさを感じたり、作家たちが自分が書くこうしていることを正確には知らないうちに本を書き始めるという多くの実例があったりするが、これらの体験や現象がわれわれに告知していることは、言葉は言葉を語る者にとって既に出来上がっている思想を翻訳するものではなくそれを完成するのであるということ、言葉の営みは思惟を促し活発な思惟は魔術的に自分で捜し求めている語を発見するということである。思惟は、言葉なしには私的な現象にとどまってしまうが、言葉であることによって相互主観的価値を獲得するのであり、「思惟は、自己を完成させるために言語表現へと赴く<sup>(26)</sup>」のである。われわれは話すことによって思惟し己が思想を知るのである。そして「思惟の作用は、いったん表現されることによってはじめて以後生きのびてゆく力をもつようになる<sup>(27)</sup>」のであり、「言葉とは、まさしく思惟が真理にまで自己を永遠化してゆく行動<sup>(28)</sup>」なのである。

このように、言葉と思惟の同時性、言葉の中の思惟というものを主張するメルロー・ポンテ



ィにとっては、言語と切り離された思惟それ自体はありえないことになる。既に表現されてしまい永遠化してしまった思惟としての二次的言語をわれわれが別に口に出さないで沈黙したまま想起することができるつまり内言化していくことによって、われわれは言葉なき思惟の内面生活といったものが存在するかのような幻想に駆られるが、実は「このいわゆる沈黙なるものも、言葉でざわめきだっている」<sup>(29)</sup>のである。

こうして、メルロー・ポンティ<sup>(29)</sup>にあっては、思惟と言葉の関係が同等視されてくるのであるが、これは、デカルトのように人間存在を＜思惟する主体＞から開始しそれに他の一切の人間活動を立脚させていくのではなく、人間存在を＜動く主体＞と見做し、身体の運動性のもとに思惟を基礎づけてゆくメルロー・ポンティの面目が躍如としている帰結であろう。

#### (4) 言語表現における他者性＝伝達性

既に語られたことを語る二次的表現であれ、誰もが語らなかったことを語る原初的表現であれ、また思惟という内的言語表現であれ、それが言語表現であるという限りにおいて、その表現の言葉は他者との共有財産としての国語を前提としてそれに負っているのである。一切の言語表現が国語に負っているというこの事実は、それだけで既にあらゆる言語表現が自閉的なものではなく他者へと開かれたものであり、それ故伝達的であることを示している。他者への伝達を明白に意図してなされる言語表現が、他者へ向けて発せられており他者を要求していることは言うまでもない。だが、他者への伝達を意図しない聴き手のいない孤独な内的独白としての思惟にあってさえ、他者性の契機は介在しているのである。内的独白とは、私が自己の考えを自己自身に明らかにすることを目指しており、それは、私が内部でもっとよく考えるために自分自身に語りかけるということである。従って、そこでは私は、話者としての私と聴者としての私とに分裂しているのである。聴者としての私は、話者としての私の語る言葉が理解可能であるか否かを判定する審判者たるべく主観的な自己自身の外へ脱け出た客観的・第三者的・他者的な私である。

かくて、メルロー・ポンティは言う、「いかなる語り手も、前もって自分を聴き手とすることによってのみ語る」<sup>(30)</sup>すなわち「人をして他者に語りかけながら自分にも語りかける」<sup>(31)</sup>と。そして、「私が語るとき、私の経験するのは私への他者の現前である」<sup>(32)</sup>とされ、表現は、私を他者化させることによって自己を脱け出し、自己と他者から成る＜われわれ＞という相互主観性の地帯へと越境していく企てであるということになる。従って、言語表現とは根本的に対他的であり、他者の承認を要請するものなのである。語ろうとする意志は理解してもらおうとする意志と同じなのであって、私の表現は、私をみずから他者の判定に委ねることなのであり、私から他者に宛てたメッセージなのである。そして、それは他者たちによって理解され解釈されることを要求しているのである。

#### (5) 解 釈

他者へ開かれ他者へ流出していく言語表現は、他者による解釈を要求してくるのであるが、

ここにおいて解釈というものが問題になってくる。

二次的表現の解釈についてみると、これは日常会話の場面で多くみられるが、その場合表現者の語る言葉は、解釈者にとっても既知の明示的意味をはめ込まれた語の通俗的使用によってなされているのであり、しかもその言表に、表現者の口調、身ぶり、表情といったような表現さるべき意味を射映してくるサブ言語的な身体表現を伴っており、解釈は極めて容易になってくる。

これに対して、原初的表現は、未だ語られざる意味を始めて語っているのであるから、解釈者にとってその理解は困難になってくる。ところで、原初的表現は、往々にして、文学書や哲学書などというように文章表現化され従ってサブ言語的なものを欠いた作品乃至テキストの形<sup>(33)</sup>になっていることが多いが、われわれがテキストを読む場合われわれの経験することは、以前からわれわれのものとなっていた思想のみを作品から理解するのではなくわれわれが自発的に考えていたより以上のことを理解しうるということである。難解なテキストを読むとき、繰返し再読を重ねていくうちに、われわれはテキストの中心部に運ばれてゆき、著者の言わんとしたことの意味がわれわれに次第に透けてみえてくるのである。これは、著者がその言葉の導きによってわれわれを連込むことを目指した著者とわれわれが出会いうる相互主観性の境域にわれわれが身を置いたからである。そのとき、われわれは、著者を通じてわれわれ自身が獲得することを欲しながらできないでいた思想をわが物にしたという感じを抱くのであり、〈汝において我なるものを発見する〉とか〈他者とは一個の私である〉という思いを強く深くするのである。このようにして、われわれは、言葉を通じて他者の思想を獲得し他者に従って思惟しそしてわれわれ自身の思想を豊かにしてゆくのである。

だが、理解するとは、単に著者の意図した意味の再把握に尽きるものではない。既にみたように、あらゆる表現は、〈意味するもの〉が〈意味されるもの〉を超えており、完全に明示的な意味を表現しえない沈黙の部分に伴う間接的表現であった。従って、著者の言葉の総体としてのテキストという〈意味するもの〉は、著者がそのテキストにおいて住まわせることを狙った〈意味されるもの〉を超えて沈黙の部分を残しており、テキストの明示性そのものとしての意味などはテキストに存在しないのであって、テキストの意味は暗示性という衣を絶えずまとってわれわれに現れてくるのである。かくしてこそ、テキストは常に著者の意図を超えてそれ自身の自立した生命をもっているといえるのである。従ってわれわれは、著者が意図した意味そのものを読みとろうとしても、著者の語ろうとしたことのある程度までの理解しか行ないえないし、またそのかわりに著者が語ろうとしなかったことまで読みとってしまうのである。それ故、完全な表現が存在しないのと同様に完全な解釈などというものも存在しないのである。それは、例えば、デカルトのテキストの解釈にあたって、われわれが〈デカルトが言わんとしていること〉とか〈デカルトならこの場合こう答えているだろうもの〉とかというようにデカルトの名において書かれていることを超えて語ろうとし、そして多様なデカルト解釈がデカルトの死後三世紀以上を経た今日に至っても依然として続けられていて、未だにデカルトの思想そのものを完全に客観的に捉えたというデカルト解釈の公認された決定版などというものが存

在しないことを見ても歴然としている。だから、メルロー・ポンティは、どのような解釈であれ全て著者を「裏切ることになる」と言うのである。

だが、どんな解釈も著者を裏切る結果になるというのが解釈につきまとう宿命であるにせよ、にもかかわらず望ましい解釈というものがあるとしたらそれはどのようなものであるのだろうか。メルロー・ポンティは、先ず、避けるべき解釈として次の二つを挙げている。そのひとつは、自分の考えに保証をとりつけるために著者の思想を歪曲し強引に自己の立場に引きつけて解釈する恣意的主観的解釈であり、もうひとつは、著者の語っていることだけに厳密に限定し著者の言わんとしたことのみに再演しようとする実証的客観的解釈である。これらの解釈は、双方共に、「われわれの解釈しようとしている著者とそれを論じている当のわれわれとが共に居合わせるような境域」に身を置こうとしないのであり、前者の解釈にあっては、著者との対話を装った思索のみせかけのもとに解釈者が自問自答しているにすぎないのであり、また後者の解釈にあっては、解釈者は、著者が他者に考えさせようとしたことから著者を切り離してしまい著者を著者の内部に押しこめてしまうのである。こうして、決意的主観的解釈と実証的客観的解釈とを共に斥けるメルロー・ポンティにあっては、望ましい解釈とは、著者によってそのテキストにおいて＜まだ思惟されないでいるもの＞＜思惟されないでしまったこと＞をテキストのページの余白に読みとりそれを浮かびあがらせることであるとされる。テキストにおいて、著者が＜思惟したこと＞は、＜思惟されなかったこと＞を抹殺しているわけではなくそれを欄外に保持しているものであり、顕在化された表現の中に沈黙の表現が行なわれているのである。その影の部分に光を当て、その未思惟部分を思惟してゆくことは、著者の導きによって可能となったのであり、それは著者の後に続いて思惟してゆくことなのである。

こうして、メルロー・ポンティは、創造的思索的解釈ともいうべきもの或いは言葉の正当な意味において批判的解釈とも言われるべきものを唱導してくるのであるが、そのようなみかけは著者の思索を外れているが故に著者に対して不忠実な、だが深部においては著者の思索に呼応しているが故に著者に対して忠実といえる創造的思索的解釈＝改訳は、まだ語られざる意味の開発となり、当然それは言語表現へと赴くであろう。かくて、創造的表現は創造的解釈を喚び、創造的解釈は創造的表現を招くのである。

〔注〕

(1) Merleau-Ponty, M. "Signes" (以下Sと略称。) Gallimard, 1960P. 25

邦訳メルロー・ポンティ『シーニエ』I、竹内芳郎監訳、みすず書房、23頁

(2) 世界とは、自己・他者・事物等を含むあらゆる存在者がそれぞれの存在意味をもって存在する普遍的全体を言う。ところで、意識とは、常に＜何ものかについての意識＞という存在り方をする、すなわち意識は意識ではない存在つまり意識の外にある存在と関わってしか存在しえないような存在である。かかる意識をもつ存在者は動物並びに人間であるが、動物の意識が己れの周囲の狭い環境に向かうのみであるのに、人間の意識は、己れを包み込みながらも己れを超えている世界という地平へ開かれ、世界へ向かい、世界を対象として定立

し世界を把握するのである。かくて人間は、世界についての認識をもつのであるが、世界の対象化把握と共に、その世界への関係の極としての自己についての意識すなわち自己意識をもつのである。従って、人間のみが世界へと超越し世界という地平を開示しそれを通じて自己を意識するのであるが、メルロー・ポンティは、かかる人間存在の根本的在り方をハイデガーに倣い世界—内属—存在 *être-au-monde* と規定している。

- (3) 私の手が他人の手を握るとき、私の手は他人の手に触れているを感じるが同時に私の手は他人の手によって触れられているを感じる。このような＜触れる—触れられる＞という経験がわれわれに教えてくれることは、他者の身体は単に私によって触れられるだけの客体的身体ではないということ、また私の身体は単に他者の身体によって触れられるだけの客体的身体ではないということ、すなわち身体は生ける身体であるということである。

- (4) Merleau-Ponty, M; “Phénoménologie de la Perception” (以下P.Pと略称)  
Gallimard, 1945, P. 230

邦訳 メルロー・ポンティ『知覚の現象学』Ⅰ、竹内・小林訳、みすず書房323頁

- (5) 知覚が地と図の分節的構造をもつゲシュタルトであることを明らかにしたのはゲシュタルト心理学の功績であるが、メルロー・ポンティは、地の上の図という知覚の構造は単にそのみならず、図は地に＜属さない＞で＜浮き出している＞しまた地は無限定で図の下にまで＜続いている＞という意味を既に帯びていると言う。

- (6) P.P, p.171、邦訳Ⅰ、245頁

- (7) S, p.84 邦訳Ⅰ、102頁

- (8) Madison, G.B. “La Phénoménologie de Merleau-Ponty”  
, Klincksieck, 1973, p.p.134—135

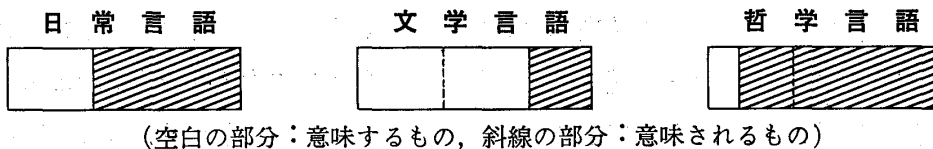
- (9) これは、一見常識的な考え方からすれば理解しにくく、言語記号のそれぞれがあらかじめ意味をもつものでなかったとしたら、意味が対比されることも不可能ではないかという反論を加えたいが、クワントによれば、ある文脈の中である一定の意味をもつ語が他の文脈においては別の意味をもつということがある（特にこれは表音文字言語に多く見られる現象で、漢字のような表意文字言語には少ないと言えるように思う。……筆者）ように、諸々の語が相互に結合しあってある全体の部分をなしているある特定の語に射映し他の語との関係で相互に決定され、この文脈においてその語が一定の意味をもってくるのである。かくして意味は語の中にはめ込まれるのである。そして同じ語の同じ結合が繰返され規則的に用いられるようになると、ある特定の語があらかじめ意味をもつようにみえてくるのであり、更には意味そのものが語とは別に語の外部に存在するような仮象を呈してきて意味が言語表現に先行するという錯覚的仮説にまで導いてゆくことになるのである。（Kwant, R. c; “From Phenomenology to Mtaphysics”, Duquesne University Press, 1966, P. 24）また、メルロー・ポンティも「文こそが各単語にその意味を与えるのであり、相異なるさまざまな文脈のなかで用いられてきたからこそ各単語は、絶対的に固

定化することなど不可能な意味を少しずつ帯びるようになってゆくのである」(P. P, p. 445、邦訳Ⅱ 272頁) と言い、「意味されるものの各要素に意味するもの各要素が対応するような仕方で記号の体系を構成すると考えるのは客観主義の思い違いであり」、しかもこの思い違いは「われわれのうちに深く根をおろしている」(Merleau-ponty, M; “La prose du monde” Gallimard, 1969, p. 205) と言っている。そして、また、もし記号と意味との間に一対一の対応関係があり記号がそれ固有の意味を最初からもっているとするれば、何故有限な記号の組合わせによって新たな意味が創り出されてくるようになるのが説明できなくなるといえる。

- (10) S. p. 112 邦訳Ⅰ、141頁
- (11) S. p. 53 邦訳Ⅰ、62頁
- (12) S. p. 53 邦訳Ⅰ、63頁
- (13) S. p. 52 邦訳Ⅰ、62頁
- (14) S. p. 56 邦訳Ⅰ、67頁
- (15) S. p. 96 邦訳Ⅰ、118頁
- (16) P. P. p. 222 邦訳Ⅰ、312頁
- (17) P. P. p. 229 邦訳Ⅰ、322頁
- (18) P. P. p. 221 邦訳Ⅰ、311頁
- (19) P. P. p. 450 邦訳Ⅱ、278頁
- (20) 滝浦静雄氏は、言葉の問題の基底には知覚の問題があり、「そして」「あるいは」「もし……ならば」「ない」といった基本的論理語も知覚的行動のなかでわれわれがそれを生きている基本構造なのであると指摘している。(青土社刊雑誌『現代思想』1973年10月号所載論文『言葉・物・意味』)
- (21) フランス語では、パロール (parole) は、文字言語を意味する écriture との対比のもとで、音声言説と訳す場合もあるが、メルロー・ポンティがここで用いているパロールはラングとの対比において使用されているのであり、メルロー・ポンティはむしろパロール (語り言葉) の延長上に文字を含み込んで考えていると思われる。
- (22) S. pp. 26 et 27、邦訳Ⅰ、25頁
- (23) 日本語とフランス語のニュアンスの相違から訳に関しては、次のとおりにした。  
langage ……言語活動ないし言葉  
parole ……言葉ないしパロール  
langue ……言語ないし国語ないしラング  
mot ……語  
signe ……記号ないし言語記号
- (24) Merleau-ponty, M; “Bulletin de psychologie (Cours de Merleau-ponty à la Sorbonne)” P.U.F. 1964. p. 258
- (25) S. P. 26 邦訳Ⅰ、24頁

- (26) P. P. P. 206 邦訳Ⅰ、291頁
- (27) P. P. P. 449 邦訳Ⅱ、278頁
- (28) P. P. P. 445 邦訳Ⅱ、272頁
- (29) P. P. P. 213 邦訳Ⅰ、301頁
- (30) Merleau-ponty, M; "Le visible et l'invisible" Gallimard, 1964. P. 202
- (31) S. P. 28 邦訳Ⅰ、27頁
- (32) S. P. 121 邦訳Ⅰ、152頁
- (33) 竹内芳郎著『言語、その解体と創造』において、文学言語と哲学言語の相違が日常言語との関連のもとで考察されている。竹内氏によれば、日常言語は明示性の強いものであるが言語場に支配され易いものであり、文学言語はこの日常言語の明示性を合意化してゆくところに成立してくるのであるが、これに対し哲学言語は日常言語の合意性を明示化してゆくところに成立してくるものである。かくして、文学言語は、日常言語のもつ過剰な意味や概念から解放され、豊かな表現機能をもつ多義的言語となり、哲学言語は、言語場への依存から脱しそれに左右されない極めて明示性の高い概念言語・論理言語となるということである。

上述のような日常言語、文学言語及び哲学言語の三者相互の関連性と相異を図示すると、次のようになる。



(空白の部分：意味するもの、斜線の部分：意味されるもの)

- (34) S. P. 201 邦訳Ⅱ、2頁
- (35) S. P. 202 邦訳Ⅱ、3頁